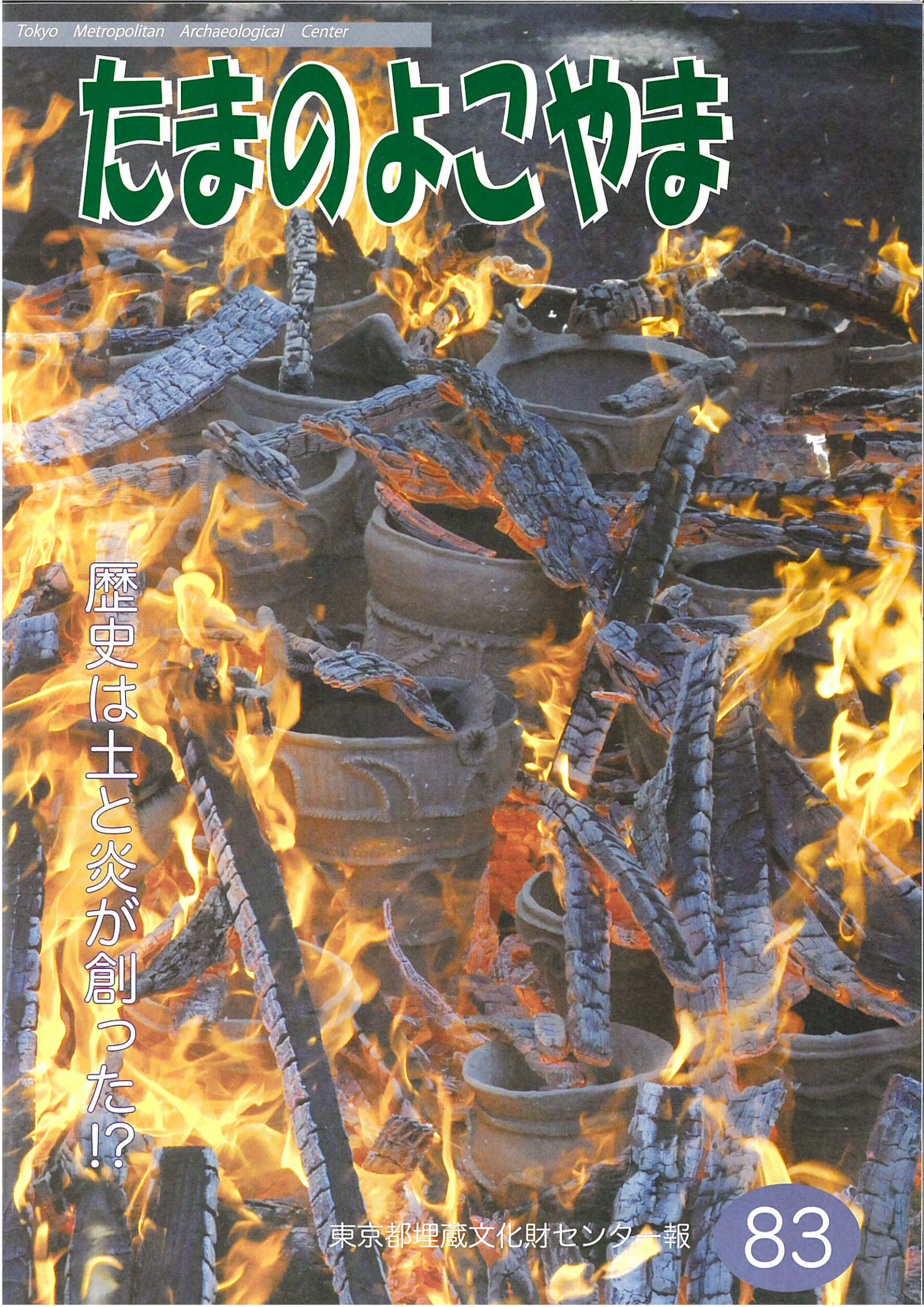
Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま



歴史は土と炎が創った!?

東京都埋蔵文化財センター報 83

How to 野焼き

埋文センターに来館される皆様から「縄文土器ってどうやって焼いていたんですか？」という質問をたびたび受けます。

縄文土器は窯を使用しない「野焼き」という方法で焼かれていたと考えられていますが、その方法は研究者の間でもまだ定まっておらず、様々な方法が試されています。今回は埋蔵文化財センターで行っている野焼きの方法をご紹介します。

9:20　火床の整備

中心の温度：４００℃

まず土器を焼く場所（火床）を作ります。地面を平らにならし、土器を並べやすく整地したところで、火床の中心から焚き火をはじめます。今回は約 50 個の土器を焼くため。直径 3.5m 程の火床を準備しました。

焚き火の回りに敷いてある板の列は土器を置くための板です。

9:55　土器の配置

中心の温度：５００℃

土器の製作から１カ月ほど陰干しして乾燥させた土器を火床の回りに並べます。

その後、中心の焚き火を徐々に大きくしていきながら、熾火を作っていきます。

「熾」とは、薪が炭になった状態のもので、火保ちが良く、温度が安定しやすいので今後の作業では重要になります。

10:40　土器の予熱

中心の温度：４５０℃

土器の底を焚き火に向け、火の熱で底面を温めていきます。いきなり土器を焚き火の中に入れると、急激な温度変化のため土器が割れてしまうからです。

一見地味な作業ですが、土器が上手に焼きあがるかどうか、この工程が非常に重要になってきます。

11:00　土器を火床の中へ

中心の温度：３００℃

十分に土器の底面が温まると、土器の表面がほんのりピンク色に染まり始めます。これが土器を火の中に入れるタイミングです。

大きな材は端に寄せ、熾火を平らにならして土器を火床の中に並べます。その後さらに熾火で３０分ほど土器を熱し続けます。

土器を並べる時は、土器と土器の間に後で薪が入るように、少し隙間を空けるようにします。

11:30　焚き上げの準備

中心の温度：２５０℃

土器が十分に予熱され、全体に色が変わってきたら、いよいよ焚き上げの合図です。

ここからは時間との勝負です。土器と土器の間に細かな端材（はざい）を入れ、さらに細材で土器をまんべんなく覆いかぶせます。

ゆっくりしているとすぐに火が回り始め、作業が出来なくなってしまうので気をつけましょう。

11:35　焚き上げ

中心の温度：７５０～８００℃

野焼きイベントのクライマックス。焚き上げの炎です。

土器を覆った細材はすぐに火が回り一気に炎が立ち上がります。一度炎が立ち上がるとしばらくは熱くて（暑いではなく）近づけません。

５～６分ほどで炎は収まり始め、炎の中から土器が姿を現します。

12:10　焼き上がり

中心の温度：１５０℃

炎が収まり、薪がすべて灰になった状態です。この後さらに土器が冷めるのを待っても良いですが、今回は焚き火の外に取り出して冷ましました。

どの土器も割れず、無事に焼き上がりました。参加された皆さんも、そして職員もこの時が一番の楽しみです。　（武内）

勾玉づくりIN多摩くらふとフェア2010

10月10日・11日の連休、多摩中央公園で「多摩くらふとフェア2010」（同実行委員会主催）が開催され、当センターも２年ぶりに参加しました。

手作りクラフト作家が一同に集い、製作の過程や個々の技術を披露しながらの製作販売がこのフェアの特徴ですが、ものづくり体験のワークショップのひとつとして、当センターは勾玉づくりを行いました。

前夜から続く雨も開催時間には雲間から日差しがさし、幸先よいスタートに恵まれました。今年は昨年の倍以上の130のクラフト作家さんが参加され、会場は大盛況。私たちの勾玉づくりも人気を博したことは言うまでもありません。

当初の開催回数を大幅に増やして２日間で計９回実施。その結果、240名もの参加者を迎えることができましたが、それでも２日目は受付開始から１時間程で早くも予約受付を終了する嬉しい事態に。

今回参加できなかったみなさま、

申し訳ございませんでした！

勾玉づくりには、柔らかい滑石を石材に用いているとはいえ、製作所要時間は１時間から１時間半程度とお伝えしています。しかし、向き合う姿勢は参加者によってさまざま。すぐに飽きてしまう方、スベスベ加減に妥協を許さずひたむきに磨き続ける方。なかでも目を惹かれたのは、３歳の女の子。ついつい世話を焼きたくなってしまいましたが、手出し無用、ポイントだけ教えてね、と言わんばかりの毅然とした態度で黙々と。ついにはお父さんの手を借りながらみごとに完成させていました。

晴天にも恵まれ、大盛況！

あの頑張りには、昨今問われることの多い、こどもの自主的な学習のありかたが現れているように思え、それをうまく引き出す枠組みづくりを考えさせられます。

また、勾玉づくりでいつも頭を悩ませるのがそのデザインの自由度。「オリジナル勾玉」をつくるとの触れ込みでしたが、かたちのオリジナル＝独自性をどこまで認めるべきか、その意味と歴史的背景をいかに伝えていくか、そこにこそ当センターで行う体験事業の意味があると思うからです。

当センターへ来館される方々は、遺跡や考古学に少なからず関心をもっていらっしゃいますが、センターの外では、当センターの存在すら知らない方々と多く接しますから、私たちの活動に関心をもって、足を運んでいただくよい機会につながります。

満ち足りた笑顔の背景に、ものづくりに始まる好奇心の広がりがあり、そしてその延長上に考古や歴史への関心が実を結べばなによりです。（大八木）

みんな真剣、そのもの。

ハイ、完成。よく頑張ったね！

分類：ブナ目ブナ科クリ属
　　ニホングリ
生態：北海道西南部～本州・
　　四国・九州に分布
特徴：落葉樹林。雌雄異花。
　　開花５～６月。

クリ 栗（和栗）

遺跡庭園「縄文の村」では、縄文時代にも生えていた50種類以上の樹木のほか、多くの野草に出会うことができます。本号より、これらの植物と縄文人とのかかわりについて、ご紹介していきたいと思います。

やや季節はずれの感はありますが、「秋の味覚」とインターネットで検索してみると、上位にランクインする「クリ」。身近なところでは「クリご飯」や「天○甘栗」、お正月には「栗きんとん」、また和菓子、洋菓子には常連の食材です。最近では皮を剥いたスナック感覚の甘栗も販売されています。

一口に「クリ」と言っても、植物学的にはブナ科クリ属の落葉樹で、日本のクリは「和栗」、中国のクリは「中国栗」、西洋の栗は「西洋栗」に分類され、種類も味も違うようです。「秋の味覚」とは言うものの、近年では一年中出回っているし、もちろん現代人の我々には馴染み深い木の実ですね。

縄文の村にもクリの木は何本か生えています。種類は「和栗」、いわゆる「芝栗」というもので、小粒の野生の栗です。小さいながらもしっかりしたイガに入っていて、「小さいから平気・・・」とうっかり素手で触れてしまうと、痛い思いをします。

縄文の村で採れるクリは、かなり小粒です。けれども、実際に食べてみるとホクホクとした食感。そして濃厚なクリの味が口中に広がります。イガだけでなく、味もしっかりしています。縄文の村の秋を体感する瞬間です。

多摩ニュータウン遺跡群では、クリそのものが出土した事例はありませんが、花粉分析の結果から、縄文時代にクリが生えていたことが明らかにされています。他地域の例ですが、縄文時代の遺跡から、現在売られているような大きさのクリと変わらないサイズのクリも発見されています。青森県にある三内丸山遺跡の調査成果から、縄文時代にクリが管理栽培されていたのではないか、ということが言われているのは有名な話です。

縄文時代のクリの柱
（石川県真脇遺跡ホームページより）

これは現代のクリ栽培と同じように、野生の芝栗の中で大きい実が成る木を選んで、実を成長させるように、意図的に枝が上に伸びないよう剪定を行っていたのかも知れません。

クリはその実だけでなく、木そのものも丈夫で加工しやすいため、竪穴住居の柱に利用されたり、杭や燃料にも多く使われていました。このことは、クリの木の木材としての利用と、クリの実の食料としての利用の異なる二つの顔があるのです。

しかし、この二つはややもすると矛盾した関係になってしまいます。大きい実をつける木は徹底して大事に管理し、ほかの木は木材や燃料に用いていたということも考えられます。想像をたくましくすれば、上に伸びる枝を剪定し、太いものは木材として使い、細めのものは燃料に、そして木の成長を助ける栄養分が、剪定することによってクリの実に回って実の成長を促すといった、一石三鳥的なことも縄文人たちは分かっていたのかも知れませんね。

・・・と原稿を書いていたら、栗を食べたくなってきました。コンビニなら加工されたクリが、この寒い時期でも当たり前のように売られています。もし縄文人がこの状況を見たら、どう思うでしょうか。便利な世の中になったものですね。　（鈴木）

多摩ニュータウンNo. 301 遺跡は八王子市鑓水(やりみず)に位置している旧石器時代終末期の遺跡です。およそ 14,000 年前ごろと言われる細石器(さいせっき)と呼ばれる旧石器時代のなかでも最小の石器が現れる頃の遺跡です。No. 301 遺跡でも良質な信州系の黒曜石を使った長さ 2cm、幅 0.6cmほどの細石刃(さいせきじん)とそれを剥ぎ取った細石核(さいせきかく)と呼ばれる細石器が出土しました。細石器が出土する遺跡は多摩ニュータウン遺跡群のなかでは、八王子市堀之内のNo. 388 遺跡、多摩市落合のNo. 769 遺跡などの大きな遺跡があり、いずれも良質な信州系の黒曜石を使った細石器が多く出土しています。

このNo. 301 遺跡はこうした大きな遺跡とは離れて位置し、周辺には同時代の遺跡が少ない地域です。礫群(れきぐん)などの遺構も見当たらず、出土した石器が 100 点にも満たない小規模な遺跡ですが、何故この小さな遺跡が不安定な多摩丘陵の、分水嶺に近い、高い丘陵の斜面上に残されたのでしょうか。

多摩丘陵を南西に下ると、すぐに隣の神奈川県相模野地域に入ります。相模野地域は細石器の大きな遺跡が多い地域ですが、多摩丘陵の東側の多摩川を渡った東京の中心にあたる地域では、殆ど細石器を出土する遺跡がありません。その頃はおそらく相模野、多摩丘陵の地域に跨る活動領域があったのでしょう。相模野地域から多摩丘陵のNo. 388 遺跡などと関係して狩猟などの活動を展開していく中継点としてこのNo. 301 遺跡はあったと思われます。次に続く縄文時代草創期も多摩ニュータウン遺跡群ではこうした細石器文化と同じような遺跡の広がりがあるようです。

この当時の日本の気候は、完新世と呼ばれる温暖な気候になり始めた時期でもあり、氷期から温暖期に移っていくなかで、大きな環境の変化があったとも言われております。考古学の歴史のなかでも、旧石器時代から縄文時代の開始に移り変わっていく時代にあたっており、旧石器時代のなかでも、今までに見たことがなかった最小の石器が使われるというミステリアスな時代であり、日本最古の土器もこの頃に出現し始めました。

細石器文化はシベリア、中国・朝鮮半島から日本に入ってきたと言われており、大陸にも近い北海道や九州では多くの細石器の遺跡が発見されております。そうした細石器文化は北海道から日本列島に沿って本州に南下し、他方では九州から北上していったとも言われており、文化的に大変ダイナミックな動きがあったようです。こうした日本列島の中央部にある多摩ニュータウン遺跡群のなかにもそうした細石器文化の影響をみることができるのです。

(比田井)

1 / 964

多摩ニュータウン地域では、964 ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

＃6　多摩ニュータウンNo. 301 遺跡

No. 301 遺跡出土石器（中央：細石刃　上段：細石核）

多摩ニュータウン南西部（抜粋）

石器の「ツボ」　Vol. 8

石鏃（その2）

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第8回。毎回、石器をひとつずつ紹介していきます。今回は、石鏃の2回目です。

石鏃とは、弓矢の「矢」の尻につける石器です。縄文時代にはきわめて一般的な石器で、多摩ニュータウン遺跡群では夥しい数の石鏃が出土しています。

石鏃は、おおむね三角形をしています。というのは、先端が獲物に刺さるように尖っているだけでなく、基部（図の下の部分）の両端にも「返し」という下に向かった尖りがあり、獲物に突き刺さった矢が抜けにくくする役割を果たしています。

このように三角形を基本としながらも、石鏃には様々な形状のものがあります。それらは、基部に茎部が有るかないか、そして茎部がない場合は平基か凹基かによって分類することができます。茎部を持つものを「有茎鏃」、基部が平らなものを「平基無茎鏃」、基部が凹んだものを「凹基無茎鏃」と呼びます。

こうした分類は、矢の棒の部分（箆）の尻への接ぎ方と関係しています。箆に穴をあけソケットを差し込むように接ぐ場合は茎部があり、「無茎鏃」の場合は箆へ挟み込むように接ぐわけです。

多摩ニュータウン遺跡群でも有茎鏃、平基無茎鏃、凹基無茎鏃などいろいろな形状のものが出土していますが、こうした形状のバラエティーは全国各地域、時期によって異なります。

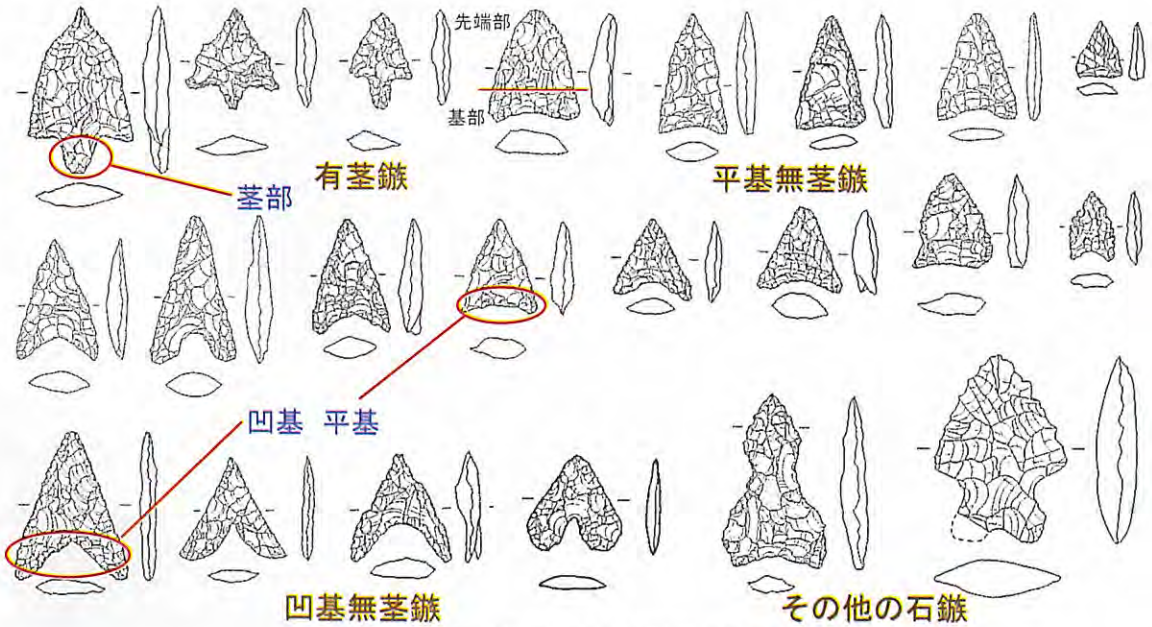
縄文時代の初めのころは無茎鏃が多く、後半になるにつれ有茎鏃が増えていくようですが、しかし地域によって違いがあり全て一律に変化するわけではありません。

その上さらに大事なことは、形状は使っている過程でも変形していくことです。矢尻という性格上、獲物に命中したり失敗して地面に突き刺さったりした際に衝撃で壊れてしまうことがあります。

石鏃は壊れたら使い捨てにするのではなく、修復が可能ならば、もう一度手を加えて作り直すことができます。その際、丈を短くするなどしますので、形状が変化します。こうしたことから、必ずしも変遷そのものを表していないと言えるのです。

石器の形ひとつをとっても、いろいろな側面があります。　つづく

石鏃の「ツボ」：石鏃には基部の形の違いから、有茎鏃、平基無茎鏃、凹基無茎鏃などに分類することができます。　（伊藤）



多摩ニュータウン遺跡群出土の石鏃（縮尺は3/4）

収蔵庫から

縄文時代の代表選手である「土偶」は、全国各地の縄文遺跡から数多く出土し、多摩ニュータウン遺跡群からも、193 点発見されています。

今回ご紹介する土偶は、稲城市若葉台の№.471 遺跡から 1988 年に発見されたもので、これまでにも当センターのポスターやチラシなどにたびたび登場してきた有名人です。特に昨年の 2009 年にはイギリスの大英博物館 (BRITISH MUSEUM) の特別展で、東京代表の土偶として海外出張もしてきました。

この土偶は、はじめに胴部下半部分の 1 点が丘陵斜面部から単独で見つかり、後に 50m ほど離れた住居跡の中から発見された 3 点の破片と接合したものですが、残りの顔の右側半分、右腕、両足先部分についてはかなり広い範囲を発掘したにもかかわらず見つかりませんでした。また、残念なことに右のオッパイもはがれてしまっています。顔の表情は柔和でやさしさを感じさせてくれますが、切れ長の目の下に引かれている 2 本の線は、入れ墨の表現かもしれません。

本土遇は、長野県の棚畑遺跡で出土した国宝土偶「縄文ヴィーナス」の系統を引くもので、今から 5000 年ほど前のものです。現在、収蔵庫を抜け出して展示室のケースにコッソリと鎮座しています。

是非、会いに来てください。

発掘調査発表会のお知らせ

当センターで本年度に実施した発掘調査の中から、
注目される 4 つの遺跡についてスライド等を使って報告します。

月　　日：平成 23 年 3 月 2 1 日（祝）
時　　間：１３時３０分～１５時３０分
発表遺跡：北区　田端西台通遺跡（弥生・奈良・平安時代）　北区　中里峡上遺跡（古墳・奈良時代）
日野市　山王上遺跡（奈良・平安時代）　千代田区　溜池山王遺跡（近世）
会　　場：東京都埋蔵文化財センター会議室
お 申 込：不要　当日受付、先着 120 名

「たまのよこやま」の由来　万葉集巻二十 之 四四一七 の 防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を　山野に放し　捕りかにて　多摩の横山　徒歩ゆか遣らむ」（宇治部黒女）　を由来としています。

たまのよこやま 83　2010 年 12 月 28 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒 206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/